アパルトヘイトとゼノフォビアのレジリエンス
南アフリカのウーバー・ビジネスに見るエスニシティとシティズンシップから

神戸大学／ケープタウン大学　梅屋　　潔

The Resilience of Apartheid and Xenophobia:
From a Glimpse on the Ethnicity and Citizenship in 'Uber' Business in South Africa

Kiyoshi UMEYA （Kobe University / University of Cape Town）

Abstract

This paper inspired from a glimpse on the 'uber' driver business in Cape Town attempts to describe some aspects of the interrelated issue concerning to ethnicity, citizenship, apartheid and recent xenophobic violence in South Africa. In post-apartheid South Africa, the existence of social and psychological barriers to cultural others remains an issue. Foreign workers tend to gather due to convenience, patron-client relationship, security reasons and economic factors, it clearly has contributed to the formation and maintenance of a characteristic ethnoscape with clear boundaries with others. Stereotyped categories with the ethnoscape tend to function as a wall between the two, and once slipping into a negative image, form an environment that serves as a template for conflict and violence is conserved. This paper tries to show the structure describing here corroborate the analysis by HSRC (the Human Sciences Research Council) on 2008 violence and still carries the risk for future.

Key words: Uber business, Cape Town, Resilience of Apartheid and Xenophobia, Ethnicity, Citizenship.

特集

1．はじめに

「マザー・シティ」の別名をもつ南アフリカ、ケープタウンは、いくつもの観光名所のある、美しい町である。ウーバーは、観光客の足として非常に便利な交通手段だが、奇妙なことにウーバーのドライバーのほとんどが西ケープ州から許可を得ていない「違法」営業である。ミニバスのドライバーも同許可を持っていないという理由で時折検挙され、車両を差し押さえられる。通常の営業をしながらも、いつか捕まるかもしれない、というよ

うな緊張感がある。

治安のよくないこの地域では「他者」に対しても慢性的に警戒心と似たような緊張感をもつ。南アフリカでは「人種」に基づくアパルトヘイト政策は撤廃されたものの、文化的他者、とくに外国人の労働者などは依然集住する傾向があり、貧富の差などの経済的要因も手伝って、人々は社会的にも空間的にもカテゴリーごとに隔離された状態で暮らすことが多い。

その結果、かなりはっきりした境界のあるエスノスケープが形成されている。ウーバーのドライバーも後述のいくつかの理由でジンバブウェ人が8割以上を占める。こうしたステレオタイプ的なエスノスケープのなかでは、お互いに接触する機会が限られており、エスニシティや国籍を越えた、相互理解のためのカテゴリーを形成する機会が乏しい。

そうしたカテゴリーは、彼我の壁としてのみ機能しがちで、ひとたびネガティブなイメージが滑り込むと、対立と暴力のテンプレートとして働いてしまう土壌が温存されている。このテンプレートが、いくつもの暴動の下支えをしてしまってきたと考えられる。

2019年9月、ヨハネスブルグで、ゼノフォビアにもとづく暴動が起こったが、過去の暴動と同じく南アフリカ国民も被害にあった。それは、対立の単位となるカテゴリーが空っぽのテンプレートになってしまっていることの証左である。

こういった状況では、意図的な扇動もされやすく、ソーシャルメディアが、ネガティブな意味で効果的な機能を果たしていることが知られている。南アフリカの何人かの政治家は、得票を確実なものにするためにゼノフォビア・ポピュリズムとも呼ばれる手法をとっているが、この手法では南アフリカシティズンの既得権と特権を主張する有権者の人気を背景に選挙には勝利するものの、単純化された含意としてはゼノフォビアを正当化しかねず、海外資本や経営者たちの南アフリカからの撤退を招いた。

選挙戦で敵対視した「外国人の犯罪者」というステレオタイプから、「犯罪者」がいつのまにか外されてしまい、「外国人」というテンプレートのみが対立と暴力の対象となってしまうのだ。

民衆がゼノフォビア暴力に走る一因は表面的には経済的困窮だといわれているが、皮肉なことに、結果として南アフリカ経済はもっと危機的な状況に追い込まれている。

2．ケープタウンのウーバー

「これはウーバーじゃないからな！話を合わせてくれ、これはウーバーじゃないんだ」

ウォーターフロントの入り口で、前をゆく車が警察に停められ、観光客らしい「白人」が降車させられている。この車にも停車指示がされそうだ、という状況である。

「おい、お前、このウーバーにいくら払ったんだ」（どうもこの警察官はウーバーのシステムについて知らないらしい。だいたいウーバーの料金はクレジットカードで、降車後に支払われるので、途中で止められた今の段階では何の取引も成立していない）「いやこれは友達を乗せているだけで、ウーバーじゃないんですよ」とドライバーはいうが警察も譲らない。「スマートフォンを見せろ」

え？持ち物検査？そこまでの権限があるの？私はちょっと驚いた。そうこうしているうちに、前の車は、警察に運搬されてしまっていた。

私はとっさにそのジンバブウェ人の愛称で彼を呼び、送ってもらっている友達の雰囲気をつくろうとした。警察の「お前もスマートフォンを出せ」という要求には、「家に忘れてきたみたい」ということで通した。しかし、ボディ・チェックまでしそうな勢いである。

幸いドライバーは、スマートフォンを二台持っていたようで、ウーバーのアプリが起動している１台を隠して、ウーバーの痕跡のないスマホを警察官に見せることで、何とか事なきを得た。ただ、私も、本当はスマホは持っていたけれど、パスポートを忘れていたので、危ないところだったのかもしれない。南アフリカでは、ID 携帯は共通の義務である。連行されても文句は言えない。

そうなるとちょっと大ごとだが、大ごとにはしたくなかったのだろう。ちょうど数日前シーポイントで警官が持ち物検査を強引にして、さらには連行までした、ということで職権乱用についての批判が高まっていたところだった。YouTube に動画まで上がっている[1]。

何とか警察はあきらめて、私たちは解放された。2019年５月週末のことだった。

南アフリカ―美しい青い空やふたつの太洋を観光資源とする明るい観光地イメージのあるケープタウンでも、どこかしら息苦しさを感じる瞬間がある。それは何か、いつかは弾が出るロシアンルーレットをやっているようなぴりぴりした感覚である。ちょっと「寛容さ」とは程遠い、閉塞した感覚がときに立ち上がってくるのである。

ある統計によれば、この国では、１日に57人殺害されている、という[2]。そのほとんどがタウンシップか都市での深夜の犯罪である、ということは、夜が更けるにしたがって市

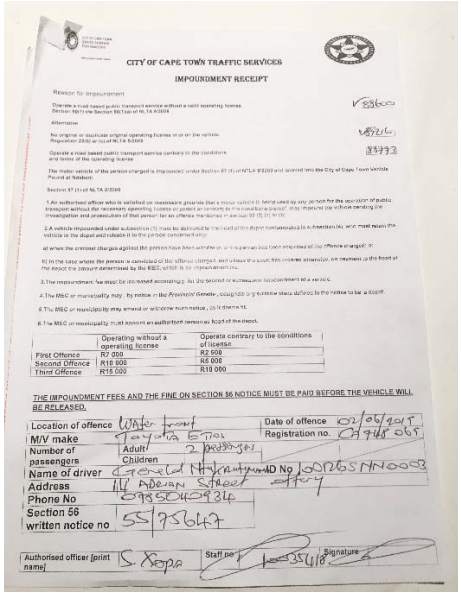
街を歩くリスクはどんどん上がっていくことになる。狙われたら、アウトだと言う人もいる。勢い、セキュリティも厳しくなっていく。ほとんどのコンパウンドは高圧電流を張り巡らした柵のなかにある。夜間も、警戒パトロールが巡回しているが、その巡回も途絶える深夜には、そこからできるだけ出ないように暮らす。

ロングストリートのある店の店主は、冬は強盗が多いから、いっそ数か月店を閉めるのだ、と私に耳打ちした。ほとんどの南アフリカでの生活者は、そうしたぴりぴりした閉塞感のなかにいるようだ。

3．違法なまま運用される不思議なビジネス

不思議なことだが、ケープタウンの観光客によって非常に便利な足であるウーバーは、ほぼ100パーセントに近い割合で、ある意味で違法らしいのだ[3]。警察官はその気になれば、すべてのウーバーを検挙することができる。ちょうどみんなが100キロ前後で走っている阪神高速で、実は制限速度が60キロなのと似ている。その気になれば、簡単に片っ端から検挙できるわけだ。

時折思い出したように（たいてい週末だが）警察はウォーターフロント近辺で待ち伏せて、取り締まりを行う。許可を得ないまま営業している彼らの車は差し押さえられ、初回


CITY OF CAPE TOWN TRAFFIC SERVICES

IMPOUNDMENT RECEIPT

Reason for impoundment

Operate a road based public transport service without a valid operating license.
Section 88(1) the Section 88 Use of NL TA 9/2009

Alternative

No original or duplicate original operating license in or on the vehicle.
Regulation 23(b) or (c) of NL TA 9/2009

Operate a road based public transport service contrary to the conditions and terms of the operating license

The motor vehicle of the person charged is impounded under Section 87 (1) of NFLA 9/2009 and covered into the City of Cape Town Vehicle Pound at Nidden

Section 87 (1) of NL TA 9/2009

1. An authorised officer who is satisfied on reasonable grounds that a motor vehicle is being used by any person for the operation of public transport without the necessary operating license or permit or contrary to the conditions thereof, may impound the vehicle pending the investigation and prosecution of that person for an offence mentioned in section 88 (1) or (2).

2. A vehicle impounded under subsection (1) must be delivered to the nearest police station in subsection (4), who must retain the vehicle in the dispo and release it to the person concerned only:

a) when the criminal charges against the person have been withdrawn or the person has been acquitted of the offence charged; or

b) in the case where the person is convicted of the offence charged and where the court has ordered attachment, on payment to the fiscal of the exact the amount determined by the MEC, which is for impoundment.

3. The impoundment fee must be increased accordingly for the second or subsequent impoundment of a vehicle.

4. The MEC or municipality may, by notice in the Provincial Gazette, prescribe a punitive daily deterrent to the notice to be a dispute.

5. The MEC or municipality may amend or withdraw such notice, as it deems fit.

6. The MEC or municipality must account an authorised person as fiscal of the fiscal.

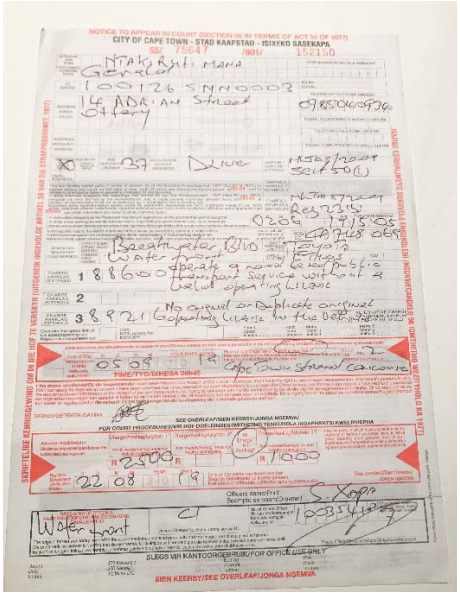
	Operating without a operating license	Operate contrary to the conditions of license
First Offence	R7 000	R2 500
Second Offence	R18 000	R5 000
Third Offence	R15 000	R10 000

THE IMPOUNDMENT FEES AND THE FINE ON SECTION 56 NOTICE MUST BE PAID BEFORE THE VEHICLE WILL BE RELEASED.

Location of offence	Water front	Date of offence	02/08/2018
M/V make	Toyota Etios	Registration no.	CY 748 065
Number of passengers	Adult/ 2 Children passengers		
Name of driver	General Hlakanyane	ID No	1001265 5NN0003
Address	14 Adrian Street Ottery		
Phone No	0785040936		
Section 56 written notice no	55/75647		

Authorised officer [print name] S. Xapa　Staff no 35618　Signature

図１　違反車両押収の原本


NOTICE TO APPEAR IN COURT (SECTION 56 IN TERMS OF ACT 51 OF 1977)

CITY OF CAPE TOWN - STAD KAAPSTAD - ISIXEKO SASEKAPA

55/ 75647 /9801/ 152150

Hlakanyane Mana
General
1001265 5NN0003
14 Adrian Street
Ottery
0785040936

37 Drive

Reg 23(b)
0289 748 065
Toyota
Etios
Breakwater Blvd
Water front
1 88600 operate a road based public transport service without a valid operating License

2

3 89721 No original or duplicate original operating License in the vehicle

05 08 18
Cape Town Strand Concourse
TIME/TYD/IXESA GIMAS

SEE OVERLEAF/SIEN KEERSYDJONGA NGEMVA

R2500 R1000

22 08 2018
Officers signature (Sign this on reverse side)
S. Xapa

Water front

SLEEG VIR KANTOORGEBRUIK/FOR OFFICE USE ONLY

SIEN KEERSY/SEE OVERLEAF/JONGA NGEMVA

図２　違反切符の原本

でR10,500払わないと取り戻すことができない（図１、図２）。これは、通常こうしたビジネスに携わるものが数日で用意することができる額ではない。

仮に金策が成功し罰金を支払うことができたとしても窓口は長蛇の列でなかなか処理してもらえず、結局２日、あるいは３日間通ってようやく車を取り戻した、という話も聞く。噂レベルでは、この罰金は警察の財源であるともいわれているが、そのように設計されているとは考えにくい（大阪府警についてもまことしやかにそうささやく人はいないわけではない）。結果的にそうなっていたとしても意図してのことではないに違いない（意図しているのであれば本当の腐敗だから本稿とは別のレベルでの検討が必要だろう[4]）。

現在では、ウォーターフロントを目指すウーバーは、警察が検問を敷いていないか、連絡を取り合うようになった。

かつては、許可を申請した人もいると聞く。しかし、誰が申請した、とはもはや伝えられておらず、仮に許可が出るとしても２年後とも５年後ともいわれている。数年間待ってウーバーの仕事をはじめるなんて馬鹿げている、とあるジンバブウェ人ドライバーは言った。確かに、すぐになんの準備もしないで始められるのがウーバー・ビジネスの魅力である。「５年後にウーバー・ビジネスをしているかどうかなんて、わからないじゃないか」。もっともな話である。

ウーバーの事務所も、この構造を知っているので、この許可については知りつつもほぼあきらめているようだ。

アプリケーションをインストールするだけで、ビジネスが始められる。それがウーバーのキャッチコピーであり、魅力である[5]。車もなくても、借りることができる。紹介もしてもらえる。初期費用はほとんどかからないのだ（実際にはかなりかかる）。グローバル・シティズンシップがスローガンで、差別もないという触れ込みだ。

大きな資本金なしに簡単にビジネスに参入できるのは、移民たちにとっては絶好のチャンスといえる[6]。実際に多くのドライバーが月R10,000ほどで車を借りてビジネスを始めている。２年ほどその状態で頑張れば、自分の車を購入して経営者になることも夢ではないという。実際、数年のうちに自分の車を手に入れただけではなくて今ではほかのドライバーに複数の車を貸して、左うちわを気取るジンバブウェ人にもあったことがある。

ドライバーに対しては、トレーニングを含め事務所での研修があり、質のそろったドライバーを供給するための企業努力がなされている[7]。

既存のタクシー・ドライバーにとっては脅威であり、彼らはテリトリーを荒らされる感

をもっている。実際に労働組合を通じて一定の干渉を政府には行っている。また、駐車場スペースなどを巡ってタクシー・ドライバーたちが集団でウーバー・ドライバーの車の鍵を奪うなど、暴力事件も起きている[8]。

4．ほとんどがジンバブウェ人？

正確な統計はないが、私の集めた資料では80パーセント以上がジンバブウェ出身であり、DRC コンゴ、マラウィ、ルワンダ、ソマリア、タンザニアなどが続く。これはある意味での南アフリカへの近隣の出稼ぎ移民の縮図である。しかし大きく偏っている。いくつかのファクターが考えられる。まず、わかりやすい下部構造。出身国の経済状況が反映するのは当然である。ジンバブエが高い割合を示しているのはハイパーインフレと経済破綻を反映しているものと理解できる。

次に、言語の問題。南アフリカ、とくに観光客が多いケープタウンで運転手になるには、アフリカーンスは喋れなくとも英語が喋れることがカギになってくる。この点は多くのアフリカーンス話者がドライバーやコンダクターを務めている、庶民の足であるミニバスの乗り合いタクシー市場とまったく対照的である。

例えば、ケープタウン大学のあるロンデボッシュから市街地に出るには、「カプスタット（ケープタウンの意。*Kaapstad*［ˈkɑːpstat］）」とアフリカーンスで叫んでいるハイエースを捕まえることになる。駅裏のバス停留所まで R10。ウーバーはドア・ツー・ドアだからサービスの質が違い単純比較は困難だが、値段はざっと10分の 1 である。ちなみに通常のタクシーはウーバーよりも、50パーセントから100パーセント割高である。しかも GPS も持っていないことが多いので、時に道に迷ったりして、歯がゆい思いをすることも少なくない。その点、ウーバーは、迷うことはほぼありえない。マッチングによってどこでも呼べていつでも来る。顧客にとってもありがたいサービスだ。私は経験上 5 分以上待たされたことは数えるほどしかない。

使用言語が英語ということになると、ジンバブウェは強い。ムガベ大統領は、その国の経済状況を考えるとほとんど無謀ともいえる教育無償化政策を実施した。こうした政策は、ハイパーインフレに象徴される深刻な経済危機を招いた一因でもある。しかし、結果、現在のジンバブウェはアフリカ大陸の中でも有数の90パーセントを超える英語の識字率を誇っているのである[9]（マラウィは例えば70パーセント台）。英語を問題なく操れるマラ

ウィ人は相当のエリートだが、ジンバブウェ人はかなりの貧困層でも英語の高等教育を受けている。英語は問題なくしゃべれる、という厚い層がジンバブウェにはあるのである。南アフリカは全体の識字率こそ94パーセントを誇るが、ここにはアフリカーンスも含まれる。国際的ビジネスには圧倒的に不利であるうえ、地域によっては識字率の低迷はこの国の課題であり続けている[10]。このジンバブウェの高い教育を受けた層がこぞってウーバー・ビジネスに参加してきているわけである。かつてはこれらの出稼ぎ民たちは、メイトランドやペロウなどといった周辺都市に住み、居住区を形成してきた。しかし昨今ではこの居住区の地価は高騰し、ニューカマーたちは空港の近くのタウンシップにほど近い場所に居住するようになってきているようだ（いわゆるジェントリフィケーション）。

もちろん、外交上の優遇策もある。代表的なものがすでに南アフリカにいたジンバブウェ人を2021年までは滞在可能にする ZEP（The Zimbabwean Exemption Permit）[11]という特別例外措置である。これは、2017年に期限が切れた ZSP（the Zimbabwean Special Dispensation Permit）の後継で、とにかくこのおかげですぐに追い出されることはなくなっている。しかも彼らは南アフリカの運転免許が取れるのである（このことはウーバー社には歓迎されている）。内務省はいったい何人のジンバブウェ人がこの資格で国内で働いているのか明らかにしていないが、2021年にもしこれが更新されないとすれば、それらの人々のステータスが即座に違法滞在、違法就労ということになりかねない。何が起こるのかは、予測するだに恐ろしい。

南アフリカで、労働収入を得ようとするものはすべて就労ビザが必要である。しかしながら就労ビザの申請には数多くの書類が必要とされるうえ、時としては不可能と思われるような書類が要求されることもある。

なかでも、ポリス・レポートは18歳以上で１年間以上住んだすべての国の警察から得ることが義務付けられている。通常のアフリカ諸国では警察から証明書を得ることは実感的に難しいことが多いから、ジンバブウェはこの点でも、非常に協力的なスタッフをそろえているといえるだろう。

ジンバブウェの歴史を考えると、本当は反政府ゲリラやデモなどで警察のやっかいになった国民は多いはずだが、彼らは証明書を問題なく得ているようである。暫定的にせよ、ZSP や ZEP という枠組みの存在はジンバブウェが就労先、居住先として南アフリカを重視しており、また南アフリカも仕組みとしては、それを容認していることがうかがわれるのである。ただし、2021年に ZEP の期限が切れた際に何が起こるのか、それはまた不安

材料ではある。

5．エスニシティのステレオタイプ化

南アフリカでは、ある程度のステレオタイプが流通しており、それもある部分まで有効である。例えば、ウーバーを別にすると、ジンバブウェ人は接客業に多い。レストランなどで、接客している人の出自を尋ねるとジンバブウェ、という答えが返ってくることが多い。一方で客に接しない、キッチンのなかは、マラウィ出身が多いのだという。家の掃除や洗濯、料理の補助など、家事手伝いはマラウィ人の得意とするフィールドなのだそうだ。「彼らは決して貴重品などがベッドルームにあったとしても盗まない」のだという。交通整理でやたらと饒舌に話しかけてくる男がいたら、それはコンゴ人にちがいない、などというものである。もちろんこれらのステレオタイプはそれほどの精密さを必要としているわけでもなく、時と場合によっては、外れていてもいいわけで、生活世界を理解するための補助的な準拠枠のひとつにすぎない。

しかし、そうした準拠枠が、具体的なデータや、具体的な事例を欠いた形で流通しているところでは、単にカテゴリー化され、そのカテゴリーが流通するだけで、中身についての意識がどうでもよくなってしまうことがある。そうなるとその空白のテンプレートは、単に私たちとは異なる者たち、というカテゴリーでしかなく、生身の人間の集合であることをやめて、～国民、～人、～民族であることすらやめて、対立の基盤としてのみ働くことになってしまう。それは、なんでもイメージを簡単に入れ込むことができるテンプレートとして、暴力的な対立を生む単位となってしまうようなのである。

かつての教訓を重く見て、「人種」というカテゴリーを警戒し、エスニシティや人種をまたぐものとしてジェンダーを措定し、アパルトヘイトよりはましだと信じて、ジェンダー間の対立があおられることもある。

ケープタウン大学女学生殺害事件をきっかけにして起こったデモ（#nene）では、数百と言われる女性たちが、黒い服を着て国会議事堂を包囲した。当初目標が明確で、大統領からの言質を得るや、無軌道な群衆に堕すことは回避されたが、うっかりするとテンプレートの中身を入れ替えられて（あるいは伝言ゲーム的に入れ間違えて）、別な無為な目的に（例えば男性が対立項にされ、男性全般への弾圧など）に転化される危険性を十分保持していたものだと思われる。

特にアパルトヘイトに代表される暴力的な事件のトラウマは、民衆のこうした動機づけに対する反応を敏感にしているようだ。無責任な断定は避けるべきだが、うっかりすると別のカテゴリーに対してすぐに攻撃的になったり残虐になったり、暴力的になってしまうような素地が、残念だが、現在のこの国にはあるのかもしれない[12]。

6．2019年ヨハネスブルグ暴動

2019年9月初めからヨハネスブルグCBD（the central business district）周辺で起きたゼノフォビア事件は、ウーバーを直接ターゲットにしたものではない[13]。タクシー・ドライバーの死を直接の引き金にしていること、それからトラックの運転手たちの外国人排斥を要求するストと、同時にシンクロして起きたことが、直接のつながりはないとしても、嫌でもウーバー・ビジネスを通じて見えることとテーマをシンクロさせられてしまう。2018年3月以降、南アフリカで200人以上の外国人トラック運転手が殺害されているとヒューマンライツウォッチは発表している[14]。

発端は、2019年9月1日、麻薬の売人をやめようとしたタクシー運転手が死亡したため、ジェッペスタウンとヨハネスブルグのCBDで、外国人が所有する店を標的にした暴動と略奪が発生したといわれている。9月5日までに497人が逮捕され、その間に略奪はアレクサンドラの町に広がった。ジョジモールにあるモスクが攻撃され、モール内のすべての店が略奪された。店主らによって、暴徒が射殺されたりもした。射殺した店主の多くは逮捕されている。

あるジンバブウェ人は、南アフリカの暴徒によって暴行を受けた後に火をつけられ、死亡した。赤ちゃんも同時に焼け死んだという[15]。

暴動は、2019年9月8日にヨハネスブルグで再燃、暴徒がCBDを行進し、外国人批判をしながら商店などを対象にルーティングを繰り返した。事態を重く見たズールーの指導者、マンゴストゥ・ブテレジ（Mangosuthu Buthelezi 1928―）が、冷静さを取り戻そうと呼びかけ、暴力をやめるよう演説を行った[16]。

暴動は、南アフリカ以外の外国人トラック運転手の雇用に抗議する全国的なストと同時進行で起こった。また、クワズール・ナタール州では、多くの貨物トラックが焼かれ、外国人トラック運転手が襲撃された[17]。つまり、運転手たちが多くかかわっていたわけだ。警察の発表によれば、暴動が始まってから関連の疑いで合計680人以上が逮捕されたとい

う。

こうした暴動事件に対応して、ザンビアのサッカー協会（FAZ）は、「南アフリカでの安全保障上の懸念」が原因で、ザンビアで行われている南アフリカとの国際サッカーの試合をキャンセル。ザンビアのピックンペイ（チェーンのスーパーマーケット）がルーティングの対象になったが、これも報復措置とみられている。

ナイジェリアでは、南アフリカの通信会社 MTN が運営するすべての店舗とサービスセンターが、南アフリカの暴動に対する会社への報復攻撃を受けて一時的に閉鎖された。Multichoice と Shoprite も営業を停止したため、他の南アフリカ企業も一時的に取引を停止した[18]。

暴動の後、ナイジェリアのムハマドゥ・ブハリ（Muhammadu Buhari, 1942―）大統領は南アフリカ高等弁務官を召喚し、事件に関する懸念を南アフリカのシリル・ラマポサ（Cyril Ramaphosa, 1952―）大統領に伝えた。ナイジェリア政府はまた、暴動に対する報復としてケープタウンで開催される予定のアフリカ経済フォーラムへの参加をキャンセルし[19]、安全保障上の懸念を理由に南アフリカの大使館を閉鎖した[20]。ナイジェリアの与党である All Progressives Congress は、ナイジェリア国民への攻撃に対する報復としてナイジェリア国内の南アフリカ企業を没収して国有化することを主張した[21]。

2019年９月、640人あまりのナイジェリア人が外国人への攻撃の中でナイジェリアへの無料便での帰国に登録した[22]。この無料便は、ラゴスをハブ航空とするエア・ピース CEO・アレン・オニェマ（Allen Onyema）が私財を投じて提供したものであった。

10月末までにはヨハネスブルグでの暴動を受けて UNHCR などへ向けて難民扱いを求めていた300名ほどの人々が、ケープタウンの UNHCR 事務所前の聖ジョージ・モール、ワルドーフ・アーケードに座り込みをしていた。南アフリカの左翼政党 EFF（Ecoonomic Free Fighter）の影響下に結党された左翼過激派集団、コンゴ自由戦士（KFF：Kongolese Freedom Fighters）[23]の中心人物の一人、人権運動家パピー・スカミ（Papy Skami）も扇動に深くかかわっている。表向きは、国外の安全な場所を求めてのことだった。10月30日、警察が排除に乗り出し、群衆と衝突、100人以上の逮捕者を出した[24]。NGO が食料提供をしていたが、それも当局は停止するよう要請[25]。この座り込みを完全に排除したい意向だが、2020年１月27日現在、メソジスト教会を拠点に、抗議行動を続けている（2020年３月１日、裁判所の決定を受けて強制執行が行われた）。

7．ゼノフォビアの温床

マナカ・ラナカ（Manaka Ranaka）、キャスパー・ニョベスト（Cassper Nyovest）、ナディア・ナカイ（Nadia Nakai）などの南アフリカを代表するセレブたちは、ゼノフォビアとその結果の暴動に対して公的に批判声明を出した[26]。

しかし、こうした表面上常識的な声明の後ろに、政府からは看過しにくい公式見解も出されている。2015年に、南アフリカ中小企業開発大臣のリンディウェ・ズールー（Lindiwe Zulu）は、外国企業経営者に対し、企業秘密を公開することを求め、それを共有しない限り、地域の経営者との平和的共存は期待できないと述べたことがあった[27]。

ズールーによれば、アパルトヘイト下の隔離によって南アフリカの経営者は不利であり、外国人の経営者のほうが有利だというのである。ズールーの見解は広く批判を浴びたが、厳しい状況に置かれた南アフリカの経営者がつい飛びつきたくなる説明力も持っている[28]。景気さえ良ければ、単なる私的見解で済むかもしれないが、こうした発言を閣僚がしてしまう土壌が、南アフリカにはある。

国の反トラスト規制当局である競争委員会による調査も、外国人と国内の事業主の業績を比べると外国人は国内の人よりも成功しているという認識を見出しているという。競争のダイナミクスの調査の結果、外国人経営者の進出が、南アフリカの小企業の成長を阻んでいるととられる結果が公表されたことも、こうした暴動に結びつくのではないかと危惧されていたところでもある[29]。

ヨハネスブルグのアフリカ移民センター、ガストロウは、ソマリア出身の小規模な小売業者たちが、薄利多売、人通りの多い地域で開店時間を長くし、幅広い製品をそろえるなど、営業努力の結果成功を収めていることを見出し、それを「ソマリノミクス」と名づけた[30]。単に「外国人」経営者の成功として統計の結果だけ見ると、このような努力は、なかったことにされてしまう。

あるジンバブウェのウーバー・ドライバーは言う。「私たちは、土曜日や日曜日を返上して働いているのだし、別に夕方になったら、仕事をやめようとか思っていない。厳しいポリス・レポートも満たしてここに働きに来ている。不満を言っているアフリカーンスしかしゃべらない連中は、ケープフラットあたりで薬を巡って殺傷事件を起こすような一味ではないのか。それにだいたい彼らは、「家族が大事だから」と、金曜日の午後からはずっと休もうとするだろう？」

もちろん、これも決めつけにほかならず、逆から照射されたステレオタイプの一例であることにかわりない。

ソーシャルメディア研究者のなかには、南アフリカ人の間でパニックを引き起こすために偽のニュース記事が出回っていると指摘するものもいた[31]。暴動事件の数か月前からソーシャルメディアを通じて外国人労働者に対してネガティブな書き込みが繰り返されていたという。このことからルワンダ大虐殺の「千の丘ラジオ」の事例を想起しないことはむしろ難しい。

ナイジェリアは在外公館を閉鎖し、ケープタウンで予定されていた首脳会議にも、各国が欠席を表明した。大統領は、事態を鎮静するようスピーチをした。

2011年の統計でも2, 200, 000人を超える移民を受け入れている南アフリカでは[32]（2019年11月現在の総人口は58, 828, 043人[33]）、このようなゼノフォビア的な出来事が間歇的に起こるようになってしまった。2008年５月暴動から、2015年、たびたび異なった理由でゼノフォビア的な暴動は起きる。2008年には62人が殺害され（うち21人は南アフリカの国民だった）、2015年にもヨハネスとダーバンで暴動は起きている。

南アフリカの人権擁護 NGO、Right2Know などは、ズールー国王グッドウィル・ツウェリチーニ・カベクズル（Goodwill Zwelithini kaBhekuzulu, 1948―）、ヨハネスブルグ市長、ハーマン・マシャバ（Herman Mashaba, 1952―）、ラマポサ統領などの南アフリカの政治家によって支持された「ゼノフォビア・ポピュリズム」の結果であるとする[34]。

2019年３月25日に、ダーバンでも約100人が外国人所有の企業を攻撃し、約50人が地元の警察署とモスクに救助を求め、３人が死亡した。2019年の南アフリカ総選挙の与党 ANC（African National Congress）の選挙マニフェストでシリル・ラマポサ統領が行ったスピーチは、犯罪活動に関与した外国人を取り締まることを約束するものだった。つまり、ゼノフォビアをあおると選挙に勝てるのだ。

この選挙利用はもちろん厳しく批判されたが[35]、逆にゼノフォビアを煽ると選挙に勝てる、という経験則は温存された。

2008年の暴動に対して、HSRC（Human Sciences Research Council）[36]が発表した分析結果は、非常に合理的かつ説得的なものである。

（１）相対的な剥奪感、特に仕事、商品、住宅の激しい競争の激化。

（２）狭いナショナリズム的な心理的な分類による集団化の過程。

（３）南アフリカのシティズンは、例外的に扱われるべきだという特権意識。または南ア

フリカ国民の他のアフリカ人に対する優越感。そして排他的シティズンシップ、または他者を排除しようとするナショナリズムの形態などである。

2019年暴動の原因についてもとくにこれにつけくわえるべきものはないようにも思われる。

人類学者として付け加えるべきは、ダグラスがバーステインから受け取って展開したグループ／グリッド論くらいであろう（Douglass 1970, 1978, Spickard 1989）。要するに、狭いグループのなかでのグループとグリッドが高いのだ。そこでは、グループごとの境界が高く、集団から期待される役割の圧力が高いことが理論的に想定されている。起こるべくして起こっているともいえるのだ。しかもこの一連の暴動のおかげでこの国の経済は非常な危機に見舞われてもいる。経済的に悪くなればなるほどゼノフォビアの物語は、勢いづいてくる。悪い連鎖である。

ケープタウンでも、10月、ミニバスのドライバーたちが一連の抗議活動を行った。たんに運行しない、というのではない。とくに18日の金曜日には、23台のミニバスが、N２の経路を封鎖しているのだ。全貌はつかめなかったが、CBD やウォーターフロントの要地を、タクシーで封鎖して、交通を遮っていたのである。迷惑な話である[37]。これは、冒頭に記した許可証関連で警察に車両を押収されたドライバーたちが、権力の乱用に抗議してのことだという。

また、先に挙げた警察との衝突でも、what's up voice で、「来い、来い」といわれてきただけのことで、群衆のなかには当初ほとんど意味が分からず集まっていたものもいたという[38]。What's up のグループはいろいろな目的でつながっているので、先導した人物の思惑とは関係なく広い範囲の人々に情報を発信できるのである。#Leavig SA、#DRCongo、#CapeTown などのツイッター・アカウントも用いられている。

2019年５月のアフリカの日に、フリーステート大学でフランシス・Ｂ・ニャムンジョが訴えたのは、「ウブントゥイズム」だった[39]。それはまさに、『インサイダーとアウトサイダー』を通じてゼノフォビアの構造を知り尽くした彼が、こうした閉塞感のなかで、ぎすぎすした敵対意識をたしなめ、開放性と、寛容さの取り戻しを提唱するものだったのである。

8．インサイダーとアウトサイダー

どの近代国家でも、外部者のモビリティは、近代国家の法制度によって規制され、既存の近代国家の関心と構造を温存しようとする。そこには、労働ビザの発給の際の必要書類の要求から承認までの手続きや、特定の労働を国家あるいは都市が管理する仕組みの中に観察することができる。これらの法制度と手続きには、内部者―シティズンを保護する強い傾向が見て取れるし、部外者がシティズンシップを獲得することには一定の困難が課されるのがふつうである。言うまでもないが、外国人労働者の労働は推奨されるものの、労働ビザの発給や、ビジネスの参入には、きわめて両義的な厳しさと緩さがみられることが指摘できる。つまり、すべての法的な条件を満たすのは極めて困難であるにも関わらず、実際の運用上ビジネスを行うことは可能になっている。

ここには、「来てもよろしい。この国のためになるのならば、仕事してもよろしい」という表向きのメッセージと「いつでも追い返せるぞ」という両義的なメッセージが同居することになる。結果として、外国人労働者は慎重に完全なシティズンシップを持たないアウトサイダーにとどめおかれ、インサイダーの利害を脅かさないものとして想定されている。また、うまく働けば、それはインサイダーを保護する十分なエージェンシーを発揮するはずなのである（少なくとも制度設計としてはそれを志向している）[40]。

しかし、状況の苦しいインサイダーは、それでも不十分だ、不十分だと言ってくる。それはそのはずで、国がいかに移民の数を絞ろうとも彼らの経済状態が改善しなければ、彼らの不満は終わることはない。自己利益を最大化することが善とされ合理的とされる、ネオ・リベラルな、新古典派的な、新ケインジアン、あるいはトランピアン的な考え方の下では、自分の成功は自分の努力の成果であるが、自分の苦境の原因は、パイの分け前をとろうとする「他者」のせいに他ならない。悪いのは外国人だ、というわけである[41]。

しかし、ゼノフォビア・ポピュリズムは選挙には勝利するかもしれないが、国家経済を困難に陥れる。それはナイジェリアなどがとったゼノフォビアへの対応でどれだけの損益を南アフリカが被ったか考えるだけでも明快だろうし、首脳どころかインベスターや観光客が来なくなったら経済は冷え込むのは目に見えている。

おりしも、2019年11月１日、Moody's では、南アフリカの投資格付けは Baa 3 にぎりぎりで据え置かれた。Baa 3 は中級格付けの最下位で、あわや「ジャンク」とされる一歩手前である。見通しは、Stable ではなく Negative に変更されている[42]。

9．テンプレートとしてのステレオタイプとウーバー・ビジネス

冒頭に述べたいくつかの要因の結果として、ほとんどがジンバブウェ人という市場がケープタウンのウーバー・ビジネスには誕生している。

こうして都市の景観には、エスニシティと肌の色によるが見た目に明確なすみわけが、ビジュアルな景観として温存されることになるのである。その意味では、政治的にアパルトヘイトが撤廃された後も、景観的には社会的空間を区別するアパルトヘイト的すみわけが観察される。

例えば、シーポイントやコックベイのレストランやバーに、夜出かけてみればよい。レストランやバーの明るい窓のなかでは、車で乗り付けた「白人」たちが、楽しそうに酒を飲んでいることだろう。一方、木枯らしの吹き付ける窓の外には、おそらくは入る金を持っていないのだろうか、「カラード」や「黒人」たちがタバコやマリファナをふかしながら立ち尽くしているだろう。駐車してある車の見張りをして、小銭を稼ぐのはたいてい「黒人」たちである。本当は、その「白人」は南アフリカ人ですらないかもしれない。しかし、「白人の高級住宅街」というステレオタイプ的なイメージも手伝って、そうした認識の多くは後景に退き、ここではアパルトヘイト的な、都市空間が出現することになるのである（もちろん職場関係や大学生など、さまざまなエスニシティが入り混じって活動する生活空間もあるのだが）。

そういったステレオタイプを裏切らないエスノスケープは、空間をまたいでお互いに相互交渉が期待されていない以上、ともすると空っぽなテンプレートになってしまう。こうした認識枠組みが提供するのは、単に、他者との隔たりのカテゴリーでしかない。何の他者理解の手掛かりでもないのに他者理解のような顔をして、身体化されてしまう。そうした身体化されたステレオタイプは、外から意図的であってもそうでなくても注入されるイメージに対して非常に脆弱である。もともと、最初の手掛かりにしたステレオタイプを、実際の経験で書き換えていくことが、他者理解の一つの道筋だとすれば、空間的な隔たりはそうした営為を妨げる。

そもそも実態がよくわからないからステレオタイプに依存しているところに、ある程度説明力をもったイメージが注入されると何が起こるかは、想像するのは容易であろう。そのイメージの多くは単純化されがちで、実際の存在者からは程遠い。当初は、「犯罪者である外国人」が、単なる「外国人」に単純化され、「女性をレイプする男性」が単なる「男

性」に一般化されることも、非常に容易なことなのだ[43]。

ゼノフォビア事件の影響か、ウーバー・ドライバーは、2019年４月時点ではほとんどが記入していた出身地の情報を軒並み消去する方向に動いている。単にビジネス上の理由でも差しさわりがあるのだという。「ジンバブウェ出身だとわかっただけで、あるいは、DRCコンゴ出身だとわかっただけで、キャンセルする客が続出した」のだという。だから、もうプロフィールに出身地を記載するのはやめたのだ、と。

私はこれはますます危険なことだと思う。出身地もわからない、正体不明の「自分たちとは違う」カテゴリーの人々が大量に登場することになるからだ。自己防衛のための手段が、もっと危険な状態を生み出してしまっているようにも思える。

暴動によって被害にあう人たちが、多くは誤爆の犠牲になっているところからも、こうした暴動がいかに非合理な動機づけで行われているか、いかに対象やターゲットを厳密に考えていないかが、容易に想像がつくのである。

手掛かりになるのは、カマウやラットランドが提唱する、バイアスを最小化するための、異なったネーションの人々を分類する、二次的な、もっと精緻なカテゴリーが乏しいことなのであろう[44]。その意味では、インサイダーの世界にもアウトサイダーの世界にも、両義的な立場となるシティズンシップを得たマクォレクォレ（*makwerekwere*）―もともとはゼノフォビックな異分子を指す差別用語だったが、ニャムンジョによって非常に動態的な活躍因子に読み替えられた―たるボツワナのカランガ・エリートのような、媒介者である[45]。こうした両義的な立場は、きわめて危険な状態にさらされてもいるが、こうした媒介者こそが、周辺から物事を活性化することはしばしば知られている。

10. おわりに

人種という概念が社会学的にあるいは人類学的にはいかにまやかしであろうとも、一見した外見で分類できる分類方法は、根強い分類力を発揮する。実際の現実はともかく、肌感覚として、どのエスニシティがビジネスで優勢かが可視化されることになる。

その意味で、アパルトヘイトというストーリーは、人類の歴史のなかでもっとも不幸な経験のひとつだったことはおそらく間違いない。

さらにそこに、トランピアン的な発想が世界的に広がってくると、自己利益の拡大は、先に述べた排外主義、シティズンシップにもとづく特権主義と結びついて、がぜん盛り上

がりを見せてくる。そうした要因の分析については、HSRC の分析でことはもう足りている。

今年、再燃したゼノフォビアの暴動事件は、こうしたアパルトヘイトのレジリエンスを背景としたゼノフォビアのレジリエンスとしてとらえることが、悲しくも可能であるように思われるのだ。その意味では、ウーバーの提示するグローバル・シティズンシップというレトリックは一見魅力的かもしれないが、隆盛を極めるウーバー・ビジネスも、起爆庫のひとつとなってしまう可能性もあるのかもしれないのである。

冒頭のエピソードで紹介した許可証は、ミニバスの運転手さえも持っていないことがあるわけだから当然だが、数少ない南アフリカ出身のウーバー・ドライバーも持ってはいなかった。南アフリカシティズンにとってもこの許可証は容易に得られないものなのだそうである。しかし、インサイダー、アウトサイダー等しく課された重荷だったとしても、ことはそう正しく認識されるであろうか。マジョリティのジンバブウェ人、あるいはほかの国の人々が、これを外国人差別と考える可能性はもちろんあり、そのことが南アフリカ人にとっても困難だと確認するよりももっと容易で何よりも困難な状況に直面した際の自己弁護のために有利である。

日本も不条理にあふれているので、とくに技能実習生という欺瞞に満ちた制度を擁する日本のシティズンとして、この国の不条理は、などと大上段に構えて言うつもりはないが、同じ苦境に直面した時、かつて「人種」というフィクションのアスクリプション的な側面を理由に不利な状況に置かれたのだという不遇の記憶は、何かことがおこると容易に復活してくるレジリエンスを持っていることはまちがいない。

何にせよ理不尽な状況はひとつひとつ改善していってほしいし、何よりニャムンジョの説くようなウブントゥイズム、寛容さを取り戻し、あるいは創造してほしいものである。ある意味ではアフリカの潜在力を象徴するような、マクォレクォレ的な活躍を果たすものが、いつ、どこに現れるのか。そのためには、南アフリカのシティズンシップ自体が、もっと開放的でなければならないような気がするのだが。本当は誰も通らないのではないかと思われるような、就労ビザのために要求された書類の山を見ながら思う[46]。

謝辞

本研究は以下の助成を受けて成立したものである。JSPS 科研費22401040、23242055、24520912、15K03042、16H05664、16K04126、19H04354、19H01400、令和元年～令和２年度二国間交流事業「自然災害人的災害に対するレジリエンスの研究―日本とアフリカの民族誌から」、平成30～令和２年度 JSPS

研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」、令和元年度神戸大学国際文化学研究科研究推進センタープロジェクト「シティズンシップ概念の地域的展開と理論的展開に関する共同研究」。

注

1．Police officers arrest a woman in Sea Point without clear cause − YouTube
https://www.youtube.com/watch?v=a4mcCebR7IM（2019年11月10日閲覧）
2．「南アフリカ、殺人事件の死者は１日当たり57人「戦争に近い域」」『AFPBB News』
https://www.afpbb.com/articles/-/3189269（2019年11月13日閲覧）
3．Applying for a public operating licence | Western Cape Government
https://www.westerncape.gov.za/service/applying-public-operating-licence（2019年11月10日閲覧）。
4．ただし、噂レベルでは、ミニバスの数の調整とそれにかかわる運営許可証の発行数の抑制には、マフィアの圧力が関係している、とも言われている。
5．About Uber − Our Story − Vision for Our Future
https://www.uber.com/za/en/about/（2019年11月10日閲覧）。
6．実際には前払いの目標収入があり、それが労働時間を長いものにしている。搾取ととられる部分もあり、いくつかの裁判も起きている。The Struggle of Driving for Uber in South Africa - The Atlantic
https://www.theatlantic.com/business/archive/2018/09/uber-south-africa/567979/（2019年11月10日閲覧）。
7．一度だけではあるが、わずか３人目の客になったことがある。その際は逆走など非常な危険運転だった。英語もあまりクリアではなかった。
8．Taxi drivers drive fear into the hearts of Uber drivers | News 24
https : / / www. news24. com / SouthAfrica / News / taxi-drivers-drive-fear-into-the-hearts-of-uber-drivers-20191003（2019年11月10日閲覧）。
9．Zimbabwe | UNESCO UIS
http://uis.unesco.org/en/country/zw?theme=education-and-literacy（2019年11月10日閲覧）。
10. Poor literacy levels still a concern in SA | Daily News
https://www.iol.co.za/dailynews/poor-literacy-levels-still-a-concern-in-sa-14601496（2019年11月10日閲覧）。
11. ZEP Permits for Zimbabweans in South Africa: What you should know
https://www.intergate-immigration.com/blog/zep-permits-zimbabweans-south-africa/（2019年11月10日閲覧）。
12. 他者に対して、ネガティブな固着した性質を付与して決めつけることは極めて暴力的な行為だから、短絡は慎重に回避されるべきだが、もしこういったことが原因で暴力に結びつく物語の筋が身体化されてしまっていると考えるなら、ことは非常に深刻である。
13. Johannesburg chaos: Alleged ”xenophobic” violence erupts again [video]
https://www.thesouthafrican.com/news/xenophobic-violence-south-africa-latest-news-8-september/（2019年11月10日閲覧）、‘We are a target: wave of xenophobic attacks sweeps,’ Johannesburg | World news | The Guardian
https://www.theguardian.com/world/2019/sep/10/we-are-a-target-wave-of-xenophobic-attacks-sweeps-johannesburg（2019年11月10日閲覧）。
14. South Africa: Deadly Attacks on Foreign Truck Drivers | Human Rights Watch
https://www.hrw.org/news/2019/08/26/south-africa-deadly-attacks-foreign-truck-drivers（2019年11月10日閲覧）。
15. ‘Zimbabwean woman recounts how husband was beaten, burnt to death in Katlehong.’ *Saturday Star*,
https://www.iol.co.za/saturday-star/news/zimbabwean-woman-recounts-how-husband-was-beaten

-burnt-to-death-in-katlehong-32498218（2019年11月10日閲覧）。'Zim woman recounts how husband was beaten, burnt to death in SA.' *Nehanda Radio*,
https://nehandaradio.com/2019/09/07/zim-woman-recounts-how-husband-was-beaten-burnt-to-death-in-sa/（2019年11月10日閲覧）。
16. 'IN FULL: Mangosuthu Buthelezi's message against xenophobia,'
https://www.timeslive.co.za/politics/2019-09-08-in-full-mangosuthu-buthelezis-message-against-xenophobia/（2019年11月10日閲覧）。
17. 'Scores arrested in looting, xenophobic protests' | News | National | M&G
https://mg.co.za/article/2019-09-03-scores-arrested-in-looting-xenophobic-protests/（2019年11月10日閲覧）。
18. MTN, MultiChoice shut branches in Nigeria amid protests over SA attacks | Fin 24
https://www.fin24.com/Companies/ICT/mtn-multichoice-shut-branches-in-nigeria-amid-protests-over-sa-attacks-20190904（2019年11月10日閲覧）。
19. Nigeria pulls out of South Africa summit after deadly riots | South Africa News | Al Jazeera
https://www.aljazeera.com/news/2019/09/nigeria-pulls-south-africa-summit-deadly-riots-190904171823632.html（2019年11月10日閲覧）。
20. South African embassy in Nigeria closed after retaliatory attacks | News 24
https://m.news 24.com/SouthAfrica/News/south-african-embassy-in-nigeria-closed-after-retaliatory-attacks-20190905（2019年11月10日閲覧）。
21. Nigerian ruling party demands takeover of SA firms | Fin24
https://www.fin24.com/Economy/nigerian-ruling-party-demands-takeover-of-sa-firms-20190908（2019年11月10日閲覧）。
22. Hundreds of Nigerians to take free evacuation from South Africa - Reuters
https://www.reuters.com/article/us-nigeria-safrica-idUSKCN1VV0ZD（2019年11月10日閲覧）。
23. Kongolese Freedom Fighters
https://www.kongolesefreedomfighters.net/（2019年11月13日閲覧）。その後2019年クリスマスを前に「プロフェッサー・パピー」率いるリンガラ話者の勢力と、スワヒリ語を話す人々が権力闘争を繰り広げ、クリスマスで留守にしていたパピーら KFF は大幅に勢力を縮小したとみられている。
24. Chaos in Cape Town as refugees evicted from city centre protest | GroundUp
https://www.groundup.org.za/article/unhcr-refugees-evicted/（2019年11月11日閲覧）。
25. Refugees order Gift of the Givers out of Methodist Church in Cape Town | News 24
https://www.news24.com/SouthAfrica/News/refugees-order-gift-of-the-givers-out-of-methodist-church-in-cape-town-20191107（2019年11月13日閲覧）。
26. Manaka Ranaka on xenophobic attacks: 'It makes me ashamed to be South African'
https://www.timeslive.co.za/tshisa-live/tshisa-live/2019-09-03-manaka-ranaka-on-xenophobic-attacks-it-makes-me-ashamed-to-be-south-african/（2019年11月10日閲覧）。
27. Reveal trade secrets, minister tells foreigners
https://www.businesslive.co.za/archive/2015-01-28-reveal-trade-secrets-minister-tells-foreigners/（2019年11月10日閲覧）。
28. Mind your own business, minister | Business | M&G
https://mg.co.za/article/2015-01-29-mind-your-own-business-minister（2019年11月10日閲覧）。
'Foreign business owners are not the enemy' - DA | News | National | M&G
https://mg.co.za/article/2015-02-02-00-foreign-business-owners-are-not-the-enemy-da（2019年11月10日閲覧）。
Small business minister wants spaza-shop trade secrets - The Daily Vox
http://www.thedailyvox.co.za/small-business-minister-wants-spaza-shop-trade-secrets/（2019年11月10日閲覧）。
29. Small foreign-owned retailers in South Africa are more competitive than local rivals - Quartz Africa

https://qz.com/africa/431733/small-foreign-owned-retailers-in-south-africa-are-more-competitive-than-local-rivals/（2019年11月10日閲覧）。

30. (PDF) Somalinomics: A case study on the economics of Somali informal trade in Cape Town | Vanya Gastrow、Roni Amit - Academia. edu
https://www.academia.edu/6827880/Somalinomics_A_case_study_on_the_economics_of_Somali_informal_trade_in_Cape_Town（2019年11月10日閲覧）。
31. YouTube
https://www.youtube.com/watch?v=8SZj4RHhzos（2019年11月10日閲覧）。
32. New York Times & others STILL wrong on number of immigrants in South Africa | Africa Check
https://africacheck.org/reports/new-york-times-use-plagiarised-article-to-back-up-sa-immigrant-number/（2019年11月10日閲覧）。
33. South Africa Population (2019) - Psychology Worldometers
https://www.worldometers.info/world-population/south-africa-population/（2019年11月10日）。
34. Right2Know blames Mashaba, Ramaphosa, Zwelithini for attacks on foreigners | IOL News
https://www.iol.co.za/news/politics/right2know-blames-mashaba-ramaphosa-zwelithini-for-attacks-on-foreigners-31739481（2019年11月10日閲覧）。
STATE IS COMPLICIT IN XENOPHOBIC VIOLENCE UNDERMINING THE RULE OF LAW – Right2Know Campaign
https://www.r2k.org.za/2019/09/02/state-is-complicit-in-xenophobic-violence-undermining-the-rule-of-law/（2019年11月10日閲覧）。
35. Xenophobic attacks spark South African response - BBC News
https://www.bbc.com/news/world-africa-47765863（2019年11月10日閲覧）。Electioneering must be free from xenophobia and respect all | Cape Times
https://www.iol.co.za/capetimes/opinion/electioneering-must-be-free-from-xenophobia-and-respect-all-20098851（2019年11月10日閲覧）。
36. 'Violence and xenophobia in South Africa: Developing consensus, moving to action.' Human Science Research Council. Wayback Machine
https://web.archive.org/web/20091124132407/http://www.hsrc.ac.za/Document-2994.phtml（2019年11月10日閲覧）。
37. Taxi protest: Cape Town commuters warned of strike action on Tuesday
https://www.thesouthafrican.com/news/cape-town-taxi-protest-updates-when-tuesday-22-october-2019/（2019年11月10日閲覧）。
38. Social media on Cape Town protests & 'police brutality': 'This is horrifying'
https://www.timeslive.co.za/news/south-africa/2019-10-31-social-media-on-cape-town-protests-police-brutality-this-is-horrifying/（2019年11月10日閲覧）。
39. ニャムンジョ（2019）を参照。講演は、2019年５月22日。
40. Nyamnjoh（2016：16）を参照。もっともこうした近代の外交的機能を、あまりにリジッドすぎるとして、ニャムンジョはシティズンシップの境界が不寛容に働いた例として退ける。
41. 南アフリカとボツワナを例にとって、ニャムンジョは、インサイダーとアウトサイダーのせめぎあいの果てにゼノフォビアが発生するダイナミズムを論じ、シティズンシップにしろ「コンプリートネス」を求めることが、この問題を解決不能にしていることを示唆する（Nyamnjoh. 2016）。
42. Moody's keeps South Africa above junk for now - with a negative outlook
https://businesstech.co.za/news/finance/350787/moodys-keeps-south-africa-above-junk-for-now-with-a-negative-outlook/（2019年11月11日閲覧）。
Moody's leaves South Africa teetering on brink of 'junk' - Moneyweb
https://www.moneyweb.co.za/news/south-africa/moodys-changes-sas-outlook-to-negative-from-stable/（2019年11月11日閲覧）。This is what awaits South Africa if Moody's cuts its rating to junk - Moneyweb

https://www.moneyweb.co.za/news/south-africa/this-is-what-awaits-south-africa-if-moodys-cuts-its-rating-to-junk/（2019年11月11日閲覧）。

43. ましてや暴力の物語が身体化されてしまっているとしたら、と考えると絶望的な気持ちにもなる。
44. Kamau and Rutland（2008）を参照。
45. Nyamnjoh（2016：93）を参照。ジンバブウェ由来とされるカランガ・エリートについては、Werbner（2004）を参照のこと。
46. もちろんニャムンジョならば、「コンプリート・ジェントルマン」を求めるシティズンシップの瑕疵を指摘し、「フレキシブル・シティズンシップ」（Nyamnjoh 2016：239-241、および Nyamnjoh（2017）、ニャムンジョ（2017，2018））を提唱するところだろう。その意味では、南アフリカ特有の「西洋っぽさ」のようなものは、アフリカ潜在力の発現を妨げる部分になりかねないのかもしれない。

参照文献

ニャムンジョ、フランシス・B．（2017）「開発というまぼろしが、ウィッチクラフトの噂を広げているのだ―カメルーンの事例を中心として」（梅屋潔訳）『思想』1120：99-127.

――――――――――――――――．（2018）「21世紀のアフリカにおけるシティズンシップの再考―ある概念的考察」（波佐間逸博訳）『文化人類学』83（2）：180-192.

――――――――――――――――．（2019）「アフリカらしさとは何か―ウブントゥという思想」（梅屋潔訳）『世界』924：184-196.

Douglass, M. (1970) *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*. Barrie & Rockliff.

――――――. (1978) *Cultural Bias*. Royal Anthropological Institute.

Kamau, C. and Rutland, A. (2008) 'A quasi-experiment on the effects of superordinate categorization on liking of people from other nations.' *Psychology and Developing Societies*, 20(2), 183-208.

Nyamnjoh, F. B. (2016) *Insiders and Outsiders: Citizenship and Xenophobia in Contemporary Southern Africa*. Codesria Books and Zed Books.

――――――――― (2017) *Drinking from the Cosmic Gourd: How Amos Tutuola Can Change Our Minds*. Langaa RPCIG.

Spickard, J. V. (1989) 'A Guide to Mary Douglas's Three Versions of Grid/Group Theory.' *Sociological Analysis*, 50(2): 151-170.

Werbner, R. (2004) *Reasonable Radicals and Citizenship in Botswana: The Public Anthropology of Kalanga Elites*, Indiana University Press.